

井上 宏 教授 略歴 (2003年3月31日)

学歴

- 1936年(昭和11) 1月7日 大阪市に生まれる
- 1951年(昭和26) 3月 大阪市立南中学校卒業
- 1954年(昭和29) 3月 大阪府立高津高等学校卒業
- 1960年(昭和35) 3月 京都大学文学部哲学科社会学専攻卒業

職歴

- 1960年(昭和35) 4月 読売テレビ放送勤務(1973年3月まで)
- 1973年(昭和48) 4月 関西大学社会学部専任講師(1974年3月まで)
- 1974年(昭和49) 4月 関西大学社会学部助教授(1981年3月まで)
- 1981年(昭和56) 4月 関西大学社会学部教授(1994年3月まで)
- 1994年(平成6) 4月 関西大学総合情報学部教授(2003年3月まで)
- 2003年(平成15) 4月 関西大学名誉教授

非常勤講師歴

- 1969年(昭和44) 4月 関西大学社会学部(1970年3月まで)
- 1973年(昭和48) 4月 同志社大学文学部(1974年3月まで)
- 1976年(昭和51) 4月 大阪市立大学文学部(1985年3月まで)
- 1984年(昭和59) 4月 関西学院大学社会学部(1985年3月まで)
- 1984年(昭和59) 4月 熊本大学文学部(1985年3月まで)
- 1987年(昭和62) 4月 大阪市立大学文学部(1988年3月まで)
- 1987年(昭和62) 4月 奈良女子大学大学院文学研究科(1988年3月まで)
- 1988年(昭和63) 4月 九州芸術工科大学芸術工学部(1996年3月まで)
- 1988年(昭和63) 4月 山梨英和短期大学(1996年3月まで)
- 1991年(平成3) 4月 神戸芸術工科大学(1993年3月まで)

その他の事項

- 1985年(昭和60) 4月 関西大学在外研究員として、米国インディアナ大学テレコミュニケーション学科客員研究員(1986年3月まで)
- 1986年(昭和61) 10月 関西大学社会学部部長代理(1988年9月まで)
- 1988年(昭和63) 4月 関西大学大学院社会学研究科修士課程講義担当
- 1989年(平成元) 2月 フルブライト委員会招聘教授として、米国ロックハースト大学客員教授(1989年12月まで)

- 1994年（平成6）4月 関西大学総合情報学部学部長代理（1996年9月まで）
- 1994年（平成6）4月 学校法人関西大学評議委員会委員
- 1994年（平成6）4月 関西大学大学院社会学研究科マスコミュニケーション学専攻修士課程の教員資格審査に合格，講義担当
- 1997年（平成9）9月 関西大学大学院総合情報学研究科社会情報学専攻修士課程の教員資格審査に合格 ○合格教授
- 1999年（平成11）9月 関西大学大学院総合情報学研究科総合情報学専攻博士課程の教員資格審査に合格 ○合格教授

賞罰

- 1985年（昭和60）3月 第2回テレコム社会科学賞受賞
受賞対象：共著『ニューメディア研究～情報新時代を考える』（世界思想社）
- 1995年（平成7）5月 大阪府知事表彰（文化芸術の向上に貢献）
- 1996年（平成8）10月 全国社会教育委員連合会会長賞
- 1997年（平成9）11月 大阪市民表彰（社会教育功労）
- 1999年（平成11）11月 文部大臣表彰（社会教育功労）

学会および社会における活動

（学会関係）

- 1983年（昭和58）5月 日本新聞学会理事（1985年4月まで）
- 1988年（昭和63）11月 社会経済システム学会理事（1992年10月まで）
- 1989年（平成元）5月 日本マスコミュニケーション学会理事（1993年5月まで）
- 1991年（平成3）3月 財団法人・情報通信学会関西支部運営委員（2002年6月まで）
- 1994年（平成6）7月 日本笑い学会会長（現在に至る）
- 1995年（平成7）6月 日本マスコミュニケーション学会理事（1998年6月まで）
- 2000年（平成12）6月 財団法人・情報通信学会理事・副会長・関西支部長（2002年6月まで）
- 2001年（平成13）6月 日本マスコミュニケーション学会理事（2003年6月まで）
- 2001年（平成13）10月 国際ユーモア学会理事（2003年12月まで）

（社会における主な活動）

- 1975年（昭和50）10月 大阪市社会教育委員（現在に至る）
- 1978年（昭和53）5月 財団法人・生活映像情報システム開発協会「生活映像情報システム評価委員会委員」（1980年3月まで）
- 1979年（昭和54）6月 社団法人・生活文化研究所常任理事（現在に至る）

- 1980年（昭和55）4月 読売テレビ「上方お笑い大賞」審査委員（現在に至る）
- 1982年（昭和57）10月 大阪府「大阪ビデオコンテスト」審査委員（1996年3月まで）
- 1984年（昭和59）4月 神戸市・ニューメディアシステム開発研究会委員（1985年3月まで）
- 1984年（昭和59）7月 奈良県高度情報化推進懇話会専門部会委員（1985年3月まで）
- 1984年（昭和59）7月 大阪府民劇場運営審議会委員（1997年3月まで）
- 1984年（昭和59）7月 大阪文化賞・大阪芸術賞選考委員（現在に至る）
- 1984年（昭和59）8月 財団法人・余暇開発センター「労働時間の活用機会の提供に関する調査研究員」（1988年3月まで）
- 1987年（昭和62）4月 大阪市情報公開懇談会委員（1988年3月まで）
- 1987年（昭和62）11月 大阪市高等学校教育審議会委員（現在に至る）
- 1990年（平成2）1月 大阪府上方演芸保存振興検討委員会委員長（1996年11月まで）
- 1990年（平成2）10月 高度情報化推進協議会「映像メディア普及のための支援方策調査委員会」座長（1991年3月まで）
- 1990年（平成2）10月 大阪府・高度情報推進協議会「都市型CATV振興調査研究会」座長（1991年3月まで）
- 1991年（平成3）12月 近畿テレコム懇談会「地域情報化促進専門委員会」座長（1994年3月まで）
- 1992年（平成4）10月 高度情報化推進協議会主催の海外調査団（アメリカ）「地域コミュニティネットワークからグローバルネットワークまで」のコーディネーター
- 1992年（平成4）6月 大阪府立高等学校芸能学科研究委員会委員長（1993年3月まで）
- 1993年（平成5）2月 社団法人・国際経済労働研究所理事（現在に至る）
- 1993年（平成5）7月 大阪生涯学習フェスティバル実行委員（現在に至る）
- 1993年（平成5）10月 大阪府立弥生文化博物館運営協議会委員（現在に至る）
- 1994年（平成6）7月 大阪市公文書館運営委員会委員（現在に至る）
- 1995年（平成7）6月 大阪放送株式会社番組審議会委員（現在に至る）
- 1996年（平成8）3月 関西国際広報センター主催の海外調査団「アジア・太平洋地域のメディアネットワークの形成と海外向け関西情報発信方策に関する調査」の団長
- 1996年（平成8）11月 大阪府立上方演芸資料館運営懇話会委員（1999年3月まで）
- 1996年（平成8）11月 大阪府文化振興財団理事（1999年3月まで）
- 1999年（平成11）4月 大阪府立上方演芸資料館（ワッハ上方）館長（2002年3月まで）

主要業績書

[著書(単著)]

- 1 『現代テレビ放送論～送り手の思想』 世界思想社 1975
- 2 『テレビの社会学』 世界思想社 1978
- 3 『まんざい～大阪の笑い』 世界思想社 1981
- 4 『笑いの人間関係』 講談社 1984
- 5 『テレビ文化の社会学』 世界思想社 1987
- 6 『テレコム社会』 講談社 1987
- 7 『大阪の笑い』 関西大学・出版部 1992
- 8 『笑いは心の治癒力』 海竜社 1997
- 9 『現代メディアとコミュニケーション』 世界思想社 1998
- 10 『笑いは心を癒し、病気を治すということ』 素朴社 1999

[著書(共編著)]

- 11 『大阪文化への提言～道楽くたのしみ>のすすめ』 (上田篤・守屋毅と共編) 大阪都市協会 1976
- 12 『ニューメディア研究～情報新時代を考える』 (多喜弘次と共著) 世界思想社 1984
- 13 『ユーモア交渉術』 (秋田実著 井上宏編) 創元社 1984
- 14 『放送演芸史』 (編著) 世界思想社 1985

[著書(共同執筆)]

- 15 『テレビ番組論～見る体験の社会心理史』 (仲村祥一・津金沢聡広・井上俊・内田明宏と共同執筆) 読売テレビ放送 1972 (全員の共同作業)

[論文(著書)]

- 1 「現代寄席とアマチュアリズム～共感と娯楽」 『現代娯楽の構造』 (仲村祥一編) 文和書房 201-234頁 1973
- 2 「放送事業体の経済的基盤」「ネットワークの問題」「編成・制作論」「放送の国際比較」 『放送論概説』 (田宮武・津金沢聡広編) ミネルヴァ書房 107-150頁 1975
- 3 「マスコミュニケーションの成立」「マスコミュニケーションの社会的機能」「マスコミュニケーションの送り手」 『現代生活の社会学』 (関西大学社会学研究会編) ミネルヴァ書房 177-196頁 1975
- 4 「タレント・ファンの社会学」 『社会学を学ぶ人のために』 (仲村祥一編) 世界思想社 132-158頁 1975
- 5 「地域のマス・コミュニケーション～新聞と放送について」 『むつ小川原開発計画の展開と

- 諸問題』（関西大学経済・政治研究所 環境問題研究班編「調査と資料」第28号） 関西大学経済・政治研究所 211-370頁 1979
- 6 「大衆文化とマス・メディア」『転換期の文化』（中農昌三・竹内洋編）創元社 75-99頁 1979
 - 7 「テレビの編成構造」『現代のテレビ(2)表現の立場から』（大山勝美編）二見書房 362-377頁 1981
 - 8 「NHK受信料」『メディア・権力・市民』（稲葉三千男編）青木書店 116-142頁 1981
 - 9 「開発計画と地域マスメディア」『地域環境問題と市民生活』（関西大学経済・政治研究所 環境問題研究班編「調査と資料」第46号） 関西大学経済・政治研究所 291-328頁 1981
 - 10 「民放の誕生・概況」「テレビの伸展とラジオの転機・概況」「テレビの成熟とよみがえるラジオ・概況」「民放の現勢と展望・概況」『民間放送30年史』（日本民間放送連盟編）日本民間放送連盟 1-4頁 67-70頁 161-164頁 271-274頁 1981
 - 11 「イベントは演出される～ブラウン管上の事件」『マスコミが事件をつくる』（中野収・早川善次郎編）有斐閣 81-98頁 1981
 - 12 「映像文化としてのテレビ」『放送文化論』（津金沢聡広・田宮武編）ミネルヴァ書店 81-103頁 1983
 - 13 「これからのCATVが与える地域社会への影響」『CATV事業化計画』（田村紀雄・小松崎清介・松平亘編）フジ・テクノシステム 29-39頁 1984
 - 14 「ニューメディアへの期待」『ニューメディアの本～ハードメーカー・自治体編』（フジミック企画・編集）日本工業新聞社 200-210頁 1984
 - 15 「大阪人の生活と笑い」『なにわくきのう・きょう・あす』（井上宏・守谷基明・市川浩平・横田健一・山田幸一・吉田永宏・肥田皓三・菌田香融著）玄文社 1-39頁 1987
 - 16 「タレント・ファンの社会学」『新版・社会学を学ぶ人のために』（仲村祥一編）世界思想社 132-158頁 1988
 - 17 「アマフェッショナル」「タッチ」「主役」「大阪」『Jの時代～生活文化の曲り角ウォッチング』（井上宏・米山俊直・中川米造・板東慧・三輪昌子・端信行著）PHP研究所 44-54頁 107-117頁 160-170頁 233-242頁 1988
 - 18 「寄席からテレビ」『現代日本文化における伝統と変容6・日本人と遊び』（守屋毅編）ドメス出版 252-269頁 1989
 - 19 「テレコミュニケーションの進展と現代社会～ケーブルテレビと通信衛星」『情報化の進展と現代社会』（関西大学経済・政治研究所 情報産業研究班編「研究叢書」第72号） 関西大学経済・政治研究所 312-355頁 1990
 - 20 「社会文化のパラダイムシフト」『成熟社会のパラダイムシフト』（井上宏・板東慧・小室豊允・菊池光造・本山義彦編）啓文社 166-176頁 1992
 - 21 「大阪の笑い」「大阪ミナミの盛り場考」『遊びと日本人～その空間と美意識』生活文化研

究所編) 啓文社 58-77頁 191-199頁 1992

- 22 「ニューメディアとメディア発展史～マスメディアの変容とニューメディア」『メディアと情報化の現在』(石坂悦男・桂敬一・杉山光信編) 日本評論社 29-46頁 1993
- 23 「笑いの本質」「笑いと社会」「笑いと人間関係」『笑いの研究』(井上宏・昇幹夫・織田正吉著) フォー・ユー 16-118頁 1997

[論文(雑誌)]

- 24 「テレビ的技法の展開～ドキュメンタリーを中心にして」『Kyowa AD Review』No.43 13-17頁 1968・8
- 25 「PT化時代の編成とセールス」『YTV Report』No.65 21-28頁 1969・10
- 26 「放送倫理基準と自主規制」『YTV Report』No.67 19-26頁 1970・2
- 27 「電波テレビにおける番組制作～テレビ広場主催者論の試み」『放送倫理情報』No.91 3-10頁 1970・7
- 28 「ネットワークと編成の論理」『YTV Report』No.76 6-21頁 1971・9
- 29 「編成機能の主体確立への道」『月刊民放』Vol.3 No.8 31-35頁 1972・4
- 30 「交流のひろばとしてのテレビドキュメンタリー」『放送朝日』No.224 30-40頁 1973・2
- 31 「番組編成の実態と課題」『YTV Report』No.86 7-15頁 1973・5
- 32 「番組編成からCM編成へ」『YTV Report』No.86 16-21頁 1973・5
- 33 「テレビ・イメージの20年」『月刊民放』Vol.3 No.8 5-9頁 1973・8
- 34 「ネットワークの理念と原点～それはいまなぜ問われるべきか」『YTV Report』No.90 8-11頁 1974・1
- 35 「テレビジョンの送り手構造」『関西大学社会学部紀要』第5巻第1号 41-55頁 1974・1
- 36 「組織と編成の活性化をさぐる～送り手ソシオロジー試論(1) 問われる『編成表現』」『月刊民放』Vol.4 No.1, 2 21-25頁 1974・1
- 37 「送り手ソシオロジー試論(2) 編成プロデューサー論」『月刊民放』Vol.4 No.3 50-54頁 1974・3
- 38 「送り手ソシオロジー試論(3) 編成理念としての広場」『月刊民放』Vol.4 No.4 24-27頁 1974・4
- 39 「送り手ソシオロジー試論(4) 『主催者』の論理」『月刊民放』Vol.4 No.5 32-35頁 1974・5
- 40 「送り手ソシオロジー試論(5) 編成と営業」『月刊民放』Vol.4 No.6 32-35頁 1974・6
- 41 「送り手ソシオロジー試論(6) 『制作表現』の独自性」『月刊民放』Vol.4 No.7

- 38-41頁 1974・7
- 42 「送り手ソシオロジー試論(7) 編成と制作の連動関係」『月刊民放』Vol. 4 No. 8
32-35頁 1974・8
- 43 「送り手ソシオロジー試論(8) 考査の論理」『月刊民放』Vol. 4 No. 9 32-35頁
1974・9
- 44 「送り手ソシオロジー試論(9) ネットワークの論理」『月刊民放』Vol. 4 No.10 34-
37頁 1974・10
- 45 「送り手ソシオロジー試論(10) 批評活動と放送」『月刊民放』Vol. 4 No.11 28-31頁
1974・11
- 46 「送り手ソシオロジー試論(11) 放送人～その組織目標と欲求充足」『月刊民放』Vol. 5
No. 1 41-45頁 1975・1
- 47 「送り手ソシオロジー試論(12) 双方『交流』は可能か」『月刊民放』Vol. 5 No. 2
34-37頁 1975・2
- 48 「放送ソシオロジーII～母なるテレビ」『放送朝日』No.249 86-91頁 1975・3
- 49 「放送ソシオロジーIII～テレビ意識」『放送朝日』No.250 93-98頁 1975・4
- 50 「放送ソシオロジーIV～リアリズムと楽の思想」『放送朝日』No.251 89-94頁 1975・5
- 51 「現代西ドイツのテレビ放送」『総合ジャーナリズム研究』No.74, 75 秋季号 97-104
頁 1975・10
- 52 「テレビ映像の論理～序論的考察」『関西大学社会学部紀要』第7巻第1号 269-283頁
1975・11
- 53 「視聴者のテレビ批判」『マスコミ市民』No.101 16-23頁 1976・4
- 54 「視聴者と送り手」『マスコミ市民』No.102 50-58頁 1976・5
- 55 「現代メディア動態論(3)『ウルトラマン文化』の形成～怪獣ブームをめぐるメディア運動」
『月刊民放』Vol. 9 No. 4 34-39頁 1979・4
- 56 「現代メディア動態論(10) 昭和40年代の『がんばり人間』～『巨人の星』が残したもの」
『月刊民放』Vol. 9 No.11 42-47頁 1979・11
- 57 「テレビ宣伝論」『放送批評』No.126 25-27頁 1979・6
- 58 「双方向映像システムと住民参加～東生駒におけるHi-OVIS実験から」『関西大学社会学
部紀要』第12巻第1号 143-169頁 1980・12
- 59 「『編成の時代』と編成研究」『放送学研究』No.33 123-151頁 1981・3
- 60 「変容するテレビ放送の体系～ニューメディアの登場について」『関西大学社会学部紀要』
第13巻第1号 1-27頁 1981・11
- 61 「ベストセラーは読者をつくる～時代と社会への“のぞき窓”として」『出版ニュース』3
月下旬号'82 4-9頁 1982・3
- 62 「社会の神経組織・ニューメディア」『月刊民放』Vol.13 No. 1 24-26頁 1983・1

- 63 「ニューメディア時代の文化」『KIIS (キース)』Vol.46 関西情報センター 1-3頁
1983・5
- 64 「強まる視聴者の“使い手”意識」『月刊民放』Vol.13 No. 8 12-15頁 1983・8
- 65 「テレビ視聴の社会学」『新聞研究』No.395 55-58頁 1984・6
- 66 「都市とニューメディア～テレポートピア構想をめぐって」『都市問題』第7巻第6号 14-25
頁 1984・6
- 67 「“軽さ”に向かう番組の情報化」『月刊民放』Vol.14 No. 7 10-13頁 1984・7
- 68 「秋田実の笑いの思想」『現代風俗』'84 第8号 6-36頁 1984・10
- 69 「ニューメディア社会の中の青春」『教育と医学』第33巻第4号 56-63頁 1985・11
- 70 「情報化と大衆文化」『社会・経済システム学会』第3号 53-57頁 1985・11
- 71 「アメリカの視聴覚教育～インディアナ大学オーディオ・ビジュアルセンターを訪ねて」
『関西大学視聴覚教育』第9号 1-6頁 1986・3
- 72 「テレビ報道に期待される国際化への期待」『月刊民放』Vol.16 No. 9 15-19頁
1986・9
- 73 「CMの社会文化的機能の開発」『月刊民放』Vol.17 No. 5 6-9頁 1987-5頁
1987・5
- 74 「日米のホームドラマ比較」『広告』No.262 15-18頁 1987・5
- 75 「アメリカのコミュニティー番組について」『都市政策』No.49 16-30頁 1987・10
- 76 「時間と距離のゼロ化に向かって～テレコム社会の今後の行方」『Traffic & Business』
No.10 1-5頁 1987・11
- 77 「ケーブルテレビと近松」『Tomorrow』Vol. 2 No. 4 23-35頁 1988・3
- 78 「日本人のユーモアの系譜」『ELIANTOS』Vol. 1 No. 2 23-35頁 1988・10
- 79 「多チャンネルCATV視聴体験記(1)(2)(3)」『月刊民放』Vol.19 No. 8 26-28頁, No.
11 26-28頁, No.12 30-32頁 1989・8/11/12
- 80 「広場の形成に貢献する討論番組」『月刊民放』Vol.20 No. 1 28-30頁 1990・1
- 81 「トーク・ジャーナリズムの伝統は健在」『月刊民放』Vol.20 No. 2 28-30頁 1990・
2
- 82 「新放送時代の番組審議会像を探る」『月刊民放』Vol.20 No. 6 14-17頁
- 83 「Television and Contemporary Society in Japan」『関西大学社会学部紀要』Vol.22
No. 1 223-234頁 1990・9
- 84 「アメリカのケーブルテレビ～プログラムサービスについて(1) スーパーステーション」
『関西大学社会学部紀要』Vol.22 No. 2 223-234頁 1991・9
- 85 「国内向け報道意識からの脱却を」『月刊民放』Vol.21 No. 1 10-13頁 1991・1
- 86 「アメリカのケーブルテレビ～プログラムサービスについて(2) CNN & Headline News」
『関西大学社会学部紀要』Vol.23 No. 1 193-216頁 1991・9

- 87 「都市とテレビ文化」『Tomorrow』Vol. 6 No. 2 13-23頁 1991・9
- 88 「アメリカのケーブルテレビ～プログラム・サービスについて(3) C-SPAN」『関西大学社会学部紀要』Vol.23 No.2 169-194頁 1992・3
- 89 「もう一つのジャーナリズムを標榜するC-SPANの実践」『放送レポート』No.119 50-54頁 1992・11
- 90 「人気番組が浮き彫りにする現代の視聴者像」『宣伝会議』Vol.41 No. 6 110-112頁 1994・6
- 91 「日本笑い学会をつくる～人間と社会にとっての笑いの意味を問う」『AURA』No.107 2-7頁 1994・10
- 92 「笑いの本質と機能」『Imago』Vol. 6-3 46-55頁 1995・3
- 93 「放送の倫理と責任～TBS問題について思う」『マスコミ市民』330号 34-40頁 1996・5
- 94 「衛星時代のアジアと日本の放送」『月刊民放』Vol.26 No.10 4-7頁 1996・10
- 95 「大阪の文化とテレビ番組制作」『月刊民放』Vol.28 No. 4 4-7頁 1998・4
- 96 「新聞はまじめであればよいのか」『新聞研究』No.571 10-14頁 1999・2
- 97 「バラエティー番組に見る日本人の笑い」『AURA』135号 2-5頁 1999・6
- 98 「心の癒しと笑い」『ターミナルケア』Vol.10 No. 4 256-259頁 2000
- 99 「大阪の生活文化と笑い」『帝塚山芸術文化』第8号 11-22頁 2001・3
- 100 「テレビ映像文化の発展～映像文化の落とし穴」『かんぽ資金』No.278 4-9頁 2001・7
- 101 「笑いと心～笑いの不思議」『精神神経学雑誌』第103巻第11号 887-1001頁 2001・11
- 102 「笑い学研究について」『笑い学研究』No. 9 3-15頁 2002・7
- 103 「笑い学事始(1) 笑う門に福来る」『ESTRELA』(財団法人・統計情報研究開発センター) No.100 88-91頁 2002・7
- 104 「笑い学事始(2) 笑うのは人間だけか」『ESTRELA』No.101 84-87頁 2002・8
- 105 「笑い学事始(3) 人間はなぜ笑うのか」『ESTRELA』No.102 82-85頁 2002・9
- 106 「笑い学事始(4) よく笑う人笑わない人～『笑う能力』の開発」No.103 82-85頁 2002・10
- 107 「笑い学事始(5) 笑いに対する態度～社会の影響」『ESTRELA』No.104 76-79頁 2002・11
- 108 「笑い学事始(6) 笑うと体内で何が起こるのか」『ESTRELA』No.105 76-79頁 2002・12
- 109 「笑い学事始(7) 笑いとコミュニケーション～笑顔の意味」『ESTRELA』No.106 82-85頁 2003・1
- 110 「笑い学事始(8) 共に笑い合う～緊張と対立を超えて」『ESTRELA』No.107 70-73頁

2003・2

[その他]

(事典分担執筆)

- 1 『マスコミュニケーション事典』（3項目）学芸書林 1971・11
- 2 『大衆文化事典』（3項目）弘文堂 1991・2
- 3 『新社会学辞典』（3項目）有斐閣 1993・2
- 4 『ENCARTA百科事典』（6項目）マイクロソフト 2000

(書評)

- 1 「テレビ症候群」（ケイト・ムーディー著，市川孝一監訳）『北海道新聞』1982・6・16
- 2 「ブラウン管の思想」（青木貞伸著）『書評』No.61 40-47頁 1982・6
- 3 「社会と放送」（酒井昭著）『宣伝会議』No.383 162頁 1982・11
- 4 「国際メディア戦争」（O.H.ギャンリー著，広松毅監訳）『北海道新聞』1984・6・5
- 5 「テレビ時代」（マーティン・エスリン著，黒川欣映訳）『北海道新聞』1986・6・16
- 6 「マスコミュニケーションの社会理論」（竹内郁郎著）『社会学評論』Vol.42 No.3 112-113頁 1991・12
- 7 「ユーモアの社会学」（森下伸也著）『ソシオロジー』No.128号 125-130頁 1997・5
- 8 「笑いのコスモロジー」（小馬徹著）『公明新聞』1999・6・28

(主な評論活動)

- 1 『民間放送』紙上の「メディア批評」連載『民間放送』（日本民間放送連盟機関紙）1995・8-1998・4
- 2 『産経新聞』紙上の「紙面批評」連載『産経新聞』1997・3-1998・7
- 3 『毎日新聞』紙面研究会委員としての紙面批評『毎日新聞』2002・1-現在に至る

以上